



平成31年度研究助成 【音楽振興部門】より

音楽科と他教科の教科連携プロジェクト —楽器製作とアンサンブルによる即興演奏（インプロ） 体験が生み出す教育的効果—

琉球大学 准教授

岡田 恵美

1. 本研究の契機

2017年公示の新学習指導要領では、各教科の特質を生かしながらも「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」[文部科学省2017:21]が掲げられたが、日本の小・中学校における音楽科教育は、未だ単独教科志向が強く、教科横断的な学習をもたらす教育的意義について、研究が十分に進展してきたとはいえない現状がある。そこで、まずは所属大学の教員養成課程の大学生達に向けて、教科連携の意義やその教育的効果について共に追究・実践する機会の必要性を提唱し、2018年より大学教員と大学生が協働して行う「教科連携プロジェクト」を開始した。

2. 教科連携プロジェクトの概要

本プロジェクトでは技術科教育との連携を主軸に、大学近隣の小・中学生を対象とした夏休みの公開講座の実施を最終目標とし、技術科の専門性を活かした楽器製作という「ものづくり」と、音楽科の特性を組み入れた、自作楽器を用いた「アンサンブルによる即興演奏体験」を融合させることによって、教科連携が生み出す教育的効果について検証することを研究の目的とした。本プロジェクトが目

指した三つの学び、第一に「ものづくり体験」、第二に「他者と協働して演奏するアンサンブル体験」、第三に「主体的な即興演奏（インプロ）体験」について、それらの活動内容とそこから見られた教育的効果を以下に考察する。

2.1 「ものづくり」が生む教育的効果

2019年度の公開講座ではアフリカの音楽をテーマとし、一説にはジンバブエ周辺のショナ族が起源と言われる体鳴楽器「ムビラ」（図1）を製作した。ムビラは、指で弾くだけで単音や和音の発音が容易な楽器で、約1時間で組立可能なように、3Dプリンタで作成した鍵を置く土台や調律用の小型ハンマーは事前に技術科が

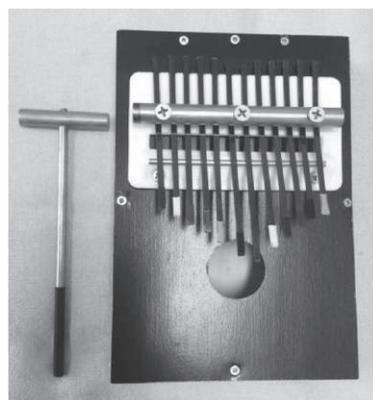


図1 製作したムビラ（筆者撮影）

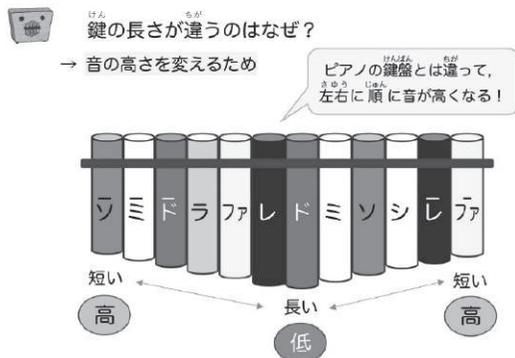


図2 ムビラの鍵の長さや配置（当日配布資料より抜粋）

用意した。子ども達はシヨナ族の音楽文化に関するクイズや実際の楽器製作を通して、金属片の長さや音高の関係性やその配置・調律方法(図2、3)、またアフリカ楽器に特有のビリビリとした「サワリ」の音について学習した。

製作後の子ども達の様子や感想から、異文化の楽器や音楽への関心や、自作楽器であるからこそ演奏への意欲が高まる様子が見られると同時に、製作時に楽器構造や部品の材質を理解しているからこそ、奏法による音色の違いを関連付けることや自ら調律することが可能となり、既製楽器を用いるだけでは意識化されない応用的な学びが子ども達に生まれていることが明らかとなった。

2.2 他者と協働して演奏する「アンサンブル体験」と教育的効果

公開講座は、大学のWEBサイトから申込をした小学3年生から中学2年生までの異年齢かつ初対面の14名が受講したため、楽器製作後に、身体を動かすアイスブレイキングを実施した。その後、自作したムビラを用いて、アフリカの音楽に特徴的なポリリズムをアンサンブルの中で体感させる活動を行った。アフリカの短いフレーズの歌を反復歌唱しながら、2拍子系グループと3拍子系グループに分かれ、各拍子に沿

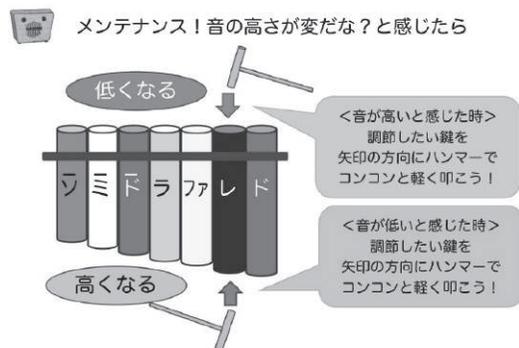


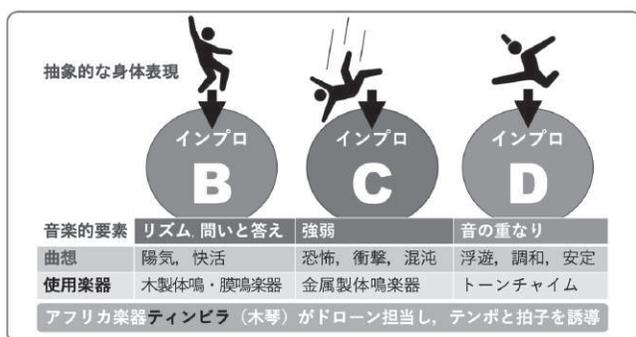
図3 ムビラの調律方法（当日配布資料より抜粋）

って自由にムビラを演奏させたところ、各自は単純な演奏ではあるが全体的なポリリズムや音の重なりに対して関心を示し、初対面の他者と協働して音楽が出来上がっていくことが面白かったという感想も寄せられた。

2.3 主体的な「即興演奏（インプロ）体験」と教育的効果

本プロジェクトで掲げた第三の学びは、主体的な即興表現である「インプロ」を音楽で経験させたことである。具体的には、指導者側による抽象的な3種類の身体表現B、C、D（図4）を、まず子ども達は模倣し、動きのエネルギーの変化（身体エネルギーの増減や重心の移動、息遣いや空間感覚）を実際に体感することを通して自覚した。その上で、各自に内面化された感性や動的なエネルギーを、今度は指定された楽器を用いて音楽で主体的に表現した。こうした即興演奏の体験を通して、身体動作と音楽表現のエネルギーの関係性に気づき、他者と即興的に音楽で対話することに子ども達が面白さを感じていたことがわかった。

本プロジェクトのもう一つの特徴として、学習成果を「作品化」することを重要視した。一連の即興表現で生まれた音楽はその場で録音し、事前に美術科学生の協力を得て作成した、



- 1) 3つの場面 (B,C,D) での曲想や、注目させたい音楽的要素を設定
- 2) 各場面の抽象的な身体表現を、学習者が模倣
- 3) 身体感覚を音に変換し、指定された楽器を用いてインプロで表現

図4 即興演奏（インプロ）活動の詳細（筆者作図）



図5 公開講座成果作品

物語性を備えた25枚の静止画スライドと直ぐに融合させ、子ども達に一つの音楽映像として完成した作品を視聴させた。子ども達は日頃からYouTube等に親しんでおり、動画作品への関心度は非常に高く、自分達の演奏した音楽が反映された作品を客観的に鑑賞することができ、とても感動したという感想も寄せられた。その音楽映像作品は、図5のQRコードより視聴可能である。

3. 終わりに

今回の教科連携プロジェクトを通して、教科の専門性を活かした「教科融合型」の教科連携は、各教科においてより複合的な教育的効果を生み出すことが明らかとなった。特に、創造性に着目した芸術教育においては、身体表現や視覚表現を音楽表現と融合させることや、作品化していく上でも、教科間で連携することがより挑戦的な学びに繋がることを強く認識することができた。プロジェクトに関わった音楽科教育・技術科教育・美術科教育の大学生達にとっても、教科の専門的な知識や技術を活かして協働していくことの意義やその学習の可能性を感じる経験であったという。実際の教育現場でも、今後

はさらに教科連携の取り組みが充実することを願い、本稿の結びとする。

謝辞

本研究の遂行において研究助成を賜りました、一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団に厚く御礼申し上げます。また、本プロジェクトに御尽力頂いた技術科の清水洋一先生に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 岡田恵美, 赤嶺絵史子 (2019)「教科の連携から生まれる発展的な学び：技術科教育と音楽科教育の連携による、楽器製作・アンサンブル体験講座からの考察」『琉球大学教育学部紀要』第94集, 琉球大学教育学部, pp.25-36.
- 2) 日本音楽教育学会 (2011)「座談会 音楽科と他教科の連携：何を拓くためにどの教科とどのように連携するのか」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会, 第8号(2), pp.98-111.
- 3) 文部科学省 (2017)『中学校学習指導要領解説 音楽編』(平成29年3月公示)